

学校自己評価結果

令和3年度3学期始めに、本校教員による学校自己評価アンケートを実施しました。またその結果をもとに、本校の学校関係者にご協力をいただき、関係者評価を実施しました。結果を簡単にまとめて報告します。

本文、表中に記載されている数値は質問項目に対する回答の平均値であり、本校教員の考えの概ねの傾向を示しています。質問項目ごとに「あてはまる度合い」について1～5ポイントで評価をつけ、項目間で比較できるようにしています。

今回は、本校における教育活動の基本ともいえるべき内容についての評価となっており、13年前、9年前、5年前と同じ項目を使用しています。

1. 自己評価

「自身の在り方」「本校全体の在り方」について、23項目のポイント評価の質問と、3項目の自由記述回答での質問を行いました。

○評価の高い項目

表1では評価が特に高かった7項目を示します。その内容から、評価の客観性を担保しながら、生徒の多様性、個別の状況や興味関心を尊重し、学力のみならず多面的な発達を見据えているという自負が見えます。

「生活態度、マナー、挨拶などを重視して指導する」「教科の学問としての顔を提示しようとする」など、自由記述にもそれをうか

がわかる表現があります。

また学年担任団持ち上がり制については非常に高い評価となつています。「6年間の生徒の成長にあった教科指導が大切」という言葉に見られるように、本校の大きな特徴である仕組みについて肯定的な評価結果であったことは歓迎すべきです。一方で、「伝統を継承していくことは大切なことだが、社会の状況に合わせて柔軟に変化していくことも大切」という意見もあります。根幹を維持しつつ、変わるべきところは変わる組織でありたいものです。

【表1】評価が比較的高い項目(高い順)

生徒の成績評価は客観的な基準に基づいている	4.3
授業内容の選別にあって、生徒の将来の進路を考慮している	4.1
個々の生徒が置かれている状況には十分に配慮しようと努めている	4.0
生徒のさまざまな面での発達を促すよう心掛けている	4.0
学年担任団持ち上がり制はうまく機能している	4.0
授業内容は、生徒の興味関心を喚起するものである	3.9
授業の難度は生徒の習熟度に合っている	3.9

【表2】評価が比較的低い項目(低い順)

到達度の低い生徒に対する配慮は十分である	3.0
防犯・事故対策等、安全管理については、満足できる状況にある	3.0
特別支援教育への取り組みについては、満足できる状況にある	3.0
学校行事の在り方は、適切な状況にある	3.1
学校は、国際化社会や時代の中で適切な方向性を志向している	3.2
部活動の在り方は、適切な状況にある	3.2
教科内容以外での生徒の様々な発達については、満足できる状況にある	3.2

○評価の低い項目

「到達度の低い生徒に対する配慮」の評価については3.4↓2.8↓3.1↓3.0と、過去13年間で、他の項目と比べると低水準で移行しています。今回の結果も、ここ十数年の本校の傾向を示しているといえます。一方で「到達度の高い生徒に対する配慮は十分である」という項目は3.8の評価です。到達度の「高い生徒」と「低い生徒」への配慮の自己評価に大きな差があるのは、「到達度の個人差が大きく授業展開や素材の精選に悩んでいる」という言葉に表れているように、現状改善への意志の表れであろうと考えられます。

安全管理や学校行事、部活動に関しては、コロナ禍中での運営ということもあり、厳しめの評価がついたのかもしれない。コロナ禍で生徒たちに窮屈な思いをさせている「コロナさえなければもっと生徒たちの自主性を発揮できる場があった」「修学旅行、中学学芸祭などが本来の形でできていない」「部活動や生徒会活動、学校行事の新たな在り方を模索しつつあり、生徒も関係する教職員も懸命に努力している」など、困難な状況での悔恨の念とともに、それでも最善を尽くそうとしている姿がうかがえます。

2. 関係者評価

「自身の在り方」「本校全体の在り方」について、「評価項目の構成」「各項目の点数」のそれぞれの妥当性について、平均して4.1ポイントの高評価をいただきました。また、有益なご意見やありがたい感想を多数いただきましたので、一部ご紹介

します。「6年間の生徒の成長にあった教科指導は大切です。従来の授業形態を自信をもってされたらどうでしょうか」「到達度が低いと判断された生徒に対しては、当該生徒の心に向き合っていたら、学習への意欲を支えていただけることを切望している」「取り巻く環境は目まぐるしく変わっていますが、そのなかでも変わらない人間的な強さや柔軟さ、コミュニケーション力等を伸ばし、人として魅力的な大人になれるよう、今後も継続して生徒を導いていきたい」「不自由な環境にあるなか、各々に対応と工夫がなされている状況に、変わらぬ安心と信頼を覚えている」「生徒たちの自主性に期待しつつも、管理職や生徒指導部、担任団からあらゆる機会を通じて、教員たちが生徒たちの現況を憂慮していることを伝え、生徒たちの行動の変化を喚起し続けることが大切」など、時に厳しいながらも、温かい目で見守っていただいていることが伝わります。

3. 終わりに

依然として続くコロナ禍のなか、有益な自己評価、関係者評価を実施することができました。今回の自己評価は数年おきに立ち返るべき、基本内容についてのものです。「変わるべきこと」と「守っていくべきこと」を考え直す必要性が浮き彫りになるような結果となりました。今回の評価結果や多数の意見を、今後の学校運営へと生かしていきたいと思っています。